

蕩子全相解

全

18  
1963  
8





不 <small>ハレ</small>	則 <small>スナハチ</small>	者 <small>モノ</small>	詩 <small>シ</small>	夫 <small>ト</small>	揚 <small>ト</small>
好 <small>ユク</small>	色 <small>イロ</small>	色 <small>イロ</small>	也 <small>ニ</small>	動 <small>ウケル</small>	子 <small>シ</small>
詩 <small>シ</small>	有 <small>アリ</small>	也 <small>ニ</small>	濞 <small>ヒラカ</small>	天 <small>テン</small>	筌 <small>シ</small>
如 <small>コトシナラ</small>	真 <small>マコト</small>	詩 <small>シ</small>	人 <small>ヒト</small>	地 <small>チ</small>	序 <small>シヨ</small>
好 <small>ユク</small>	与 <small>ユ</small>	有 <small>アリ</small>	心 <small>ココロ</small>	感 <small>カン</small>	
色 <small>イロ</small>	為 <small>ナリ</small>	正 <small>セイ</small>	破 <small>ヤル</small>	鬼 <small>キ</small>	
者 <small>モノ</small>	是 <small>コト</small>	與 <small>ユ</small>	家 <small>カ</small>	神 <small>シン</small>	
何 <small>ナニ</small>	故 <small>ユヘ</small>	變 <small>シユ</small>	業 <small>キヤク</small>	者 <small>モノ</small>	



Vertical calligraphic text on the right page.



へ13  
1963  
8

用<sup>エツテ</sup>詩<sup>シ</sup>解<sup>カイ</sup>為<sup>セ</sup>哉<sup>ヤ</sup>吾<sup>ワ</sup>友<sup>トモ</sup>茶<sup>チヤ</sup>  
釜<sup>カマ</sup>先<sup>ヒシ</sup>生<sup>セイ</sup>頃<sup>コノ</sup>日<sup>ヒ</sup>以<sup>モツテ</sup>吉<sup>ヨシ</sup>原<sup>ハラ</sup>  
辭<sup>コトハシ</sup>解<sup>カイス</sup>毛<sup>ケ</sup>唐<sup>トウ</sup>人<sup>ジン</sup>之<sup>ノ</sup>詩<sup>シ</sup>其<sup>ソノ</sup>  
解<sup>カイ</sup>也<sup>ヤ</sup>不<sup>ス</sup>啻<sup>タ</sup>解<sup>トク</sup>人<sup>ヒト</sup>願<sup>ゾトタイラ</sup>耳<sup>ノミナラ</sup>  
吉<sup>ヨシ</sup>原<sup>ハラ</sup>之<sup>ノ</sup>善<sup>セン</sup>惡<sup>アク</sup>無<sup>ナシ</sup>一<sup>イツト</sup>不<sup>サハ</sup>  
施<sup>ホコサ</sup>其<sup>ソノ</sup>解<sup>カイ</sup>也<sup>ヤ</sup>嗚<sup>ア</sup>呼<sup>ハ</sup>非<sup>アラズニハ</sup>是<sup>コレ</sup>

先<sup>セン</sup>生<sup>セイ</sup>之<sup>ノ</sup>好<sup>コトム</sup>詩<sup>シ</sup>及<sup>ヲ</sup>色<sup>イロ</sup>則<sup>スハチ</sup>  
何<sup>ナニ</sup>以<sup>モツテ</sup>右<sup>ミダリ</sup>如<sup>コトキ</sup>此<sup>カク</sup>之<sup>ノ</sup>詳<sup>ツマニラカニノカツ</sup>且<sup>ツ</sup>  
尽<sup>ツク</sup>右<sup>ミダリ</sup>哉<sup>ヤ</sup>以<sup>モツテ</sup>是<sup>コレ</sup>觀<sup>ミレ</sup>之<sup>ノ</sup>談<sup>コトハサニ</sup>  
所<sup>トコロ</sup>謂<sup>イウ</sup>飛<sup>トシク</sup>茶<sup>チヤ</sup>釜<sup>カマ</sup>者<sup>ナリ</sup>即<sup>スハチ</sup>先<sup>セン</sup>  
生<sup>セイ</sup>之<sup>ノ</sup>謂<sup>イハルカ</sup>也<sup>ヤ</sup>予<sup>ツイニ</sup>遂<sup>タメニ</sup>為<sup>コレ</sup>之<sup>ノ</sup>  
序<sup>シヨス</sup>

壹貫三年十一月

陶鐵房撰



蕩子筌枉解

五言絶句

茶筌散人著

門人藥罐子輯

題袁氏別業

ろのみちちれの中の所へ葉やを出すその名をよま  
日を山屋といふ別業ハヤキのふあれさしち  
屋とこら

主人不相識

偶坐為林泉

けさるこのあうたいをん  
女席がゆめわやい

莫謾愁酤酒

らさうさいいーそんの  
あまあひひめさるを

囊中自有錢

こんれくもつひよとありて  
あんとやうと右大年切のしやう

夜送趙縱

あまを大めんまてあくるやう  
女席の遊名ありセツ半がえりの

趙氏連城辟玉

趙氏の字よるんあをさめてねん  
趙の字よるんあをさめてねん

趙氏連城辟玉

あまを大めんまてあくるやう  
女席の遊名ありセツ半がえりの

由來天下傳

そかひひやうむんの  
園くんしん

送君還舊府

旧府の字よるんあをさめてねん  
送君還舊府

明月滿前川

あまの月さきへひらく  
あまの月さきへひらく

易水送別

易水の字よるんあをさめてねん  
易水の字よるんあをさめてねん

易水送別

易水の字よるんあをさめてねん  
易水の字よるんあをさめてねん

いふところまでおつりて別れをすす今は丹七といふ  
松とこもこころのおとんきまり三百おきてねざり  
りけてもていし由穴さうけて又百ぬ一湯もまじり  
いとしかそこで女帝もあもていしゆをうむむこと  
あさうさ地のとくかうをいの使たの今月女帝  
せぬれませよさううれりきさよてあれを子まそ  
のりあいゆるをりつてたいは丹七かうてり  
雄雄の燕せりりぬのよーで二世三世のゆく  
さるもくこれせーつてちやをさるの燕丹く

此地別燕丹  
壯志髪衝冠

いのちがけの志ごとあり  
ねんごろまたのんで予  
せぬれこちかせてませませ  
りちもんーるばいきては目

よかごころまいとたちまらかこさうごらあうり三件のみ乃  
つきたる頼りなりさぬくいまないあり  
昔時人已没  
しゆひあぬれこちか今今  
ふとありてぬるそのくらは使大

今日水猶寒  
今このあうふがそれのをてあさゆ  
のりありもしえんく一袋一めんも見

贈喬侍御  
ありは使さる川へんて名たつさ大

受りて磯せりのぬきえより一万あるの金とたらま  
ちよつひすてりそのころよりしうしう何げや何しう二  
と雲閣甚とごうして大あらあげやありたり宇項天  
へものほろべきいまいあるとてうんくといふことばは  
しめさるゆのよて弟附のちをつんとて名とささたどん  
を二十八人ごうざいしきよいごうかごりのていをはせ  
おきりりこのきん信太きんをへうふたれどもあうまよ  
で名のたうさをしくかへさりしを好むのりの  
あされんでこの法をつくとりか

漢庭榮巧宦 かんてい けいウクハシハカフ  
巧宦といはあまり大金をほりひら

雲閣薄邊功 ウンカク ユウワカムニフ  
おち場処て名のたうきハ  
さうまたうぬといふことろ





已被春風吹

スデニヒエンフウニフカル  
もろの春のあけはるるよあらしら  
らへばまはらうてやまをよまはら

妾心正断絶

セフカエハロコニサニタンセツス  
うれよつげこれよつげあめいよえを  
んとそよりまをかてめらう

君懷那得知

キミカワモヒナシノシルヲラエン  
けうろもあはれよそののちめし  
くさりあはれおのちもあはれふらさ

南樓望

カニロウ  
まはるへあまいさをまわてゆく突出の  
女帝とよめあはれんばうのころ

去國三巴遠

クニヲサツテサニハ  
こまをさかりてよめ  
よりあやめといれまはれんばあはれ

登樓萬里春

ロウニノホルハニ  
ニういより見まはせバ一めんよあ  
ききちちくしてめらう

傷心江上客

コハロヨイタニシムコウニヤウノカク  
あはれあはれまはらうよつげても  
あやさとあめいひりびさう

不是故鄉人

コレユキヤウノヒトナラズ  
りやあはれよ人ていはい同所  
まどがきていねあのお人いん

不是故鄉人

まうまのドや○譯は曰今三ヶ月  
くまはれのまうまもできらさけのまうまもくべつよあはれ  
をいのち探もえんまらうてまうまもくきもてる今まを  
けのこまらしもうらまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

上ウラハのミあはるミごあはるミにミのミこミりミてあミげミまミまミとミりミやミこミやミ  
女メ帝ミ一ヒ子コ

汾上驚秋

汾フシ川カハの名ナあミれミどミもミたミあミのミあミうミこミ  
あミらミうミるミべミーミはミ戸ミ可ミ一ヒ下カ中ナカのミ所トコロ

北風吹白雲

北ホク風カゼ吹フク白シラ雲クモ  
七シチ月ツキ中ナカへニさミうミろミうミろミどミさミあミれミばミめミのミうミ  
さミあミさミとミあミめミらミげミんミじミつミ日ヒのミ回マ季キ旅リのミ

萬里渡河汾

萬マン里リ渡ワタ河カハ汾フシ  
幾ナニもミ万マン里リとミりミあミるミもミさミくミけミひミやミ  
なミがミふミいミてミひミとミ急イサめミのミうミろミうミろミうミろミ

心緒逢揺落

心ココロ緒ヲ逢ア揺ユ落ラク  
いミろミくミユミめミんミのミまミらミいミ時トキ々々回マ所トコロはミまミ  
がミがミまミまミげミてミなミのミ本ホのミこミをミふミまミかミ

秋聲不可聞

秋アキ聲コエ不ズ可ク聞ク  
發ハツ板イタがミあミつミてミもミ子コつミがミよミいミあミまミ  
うミぜミのミひミやミくミがミまミらミちミやミいミやミ

蜀道後期

蜀シヨク道ダウ後ゴ期キ  
蜀シヨクのミくミよミらミ天テン下カぶミさミしミのミあミんミあミまミよミ  
いミろミくミのミわミんミまミんミをミ志シのミんミでミあミらミいミ

客心争日月

客カク心シン争ソウ日ニチ月ゲツ  
わミんミあミまミのミ女メ帝ミをミ争ソウくミそミくミ一ヒこミ二ニ日ニチ  
くミ一ヒ月ゲツくミとミあミひミをミ争ソウりミてミまミらミてミ

來往預期程

來ライ往ワウ預ヨ期キ程テイ  
あミまミきミのミ女メ帝ミをミ争ソウくミそミくミ一ヒこミ二ニ日ニチ  
くミ一ヒ月ゲツくミとミあミひミをミ争ソウりミてミまミらミてミ

秋風不相待

秋アキ風フウ不ズ相サウ待タイ  
あミまミきミのミ女メ帝ミをミ争ソウくミそミくミ一ヒこミ二ニ日ニチ  
くミ一ヒ月ゲツくミとミあミひミをミ争ソウりミてミまミらミてミ

かミくミこミれミまミでミかミらミひミあミらミせミ道ミチ日ヒつミれミてミゆミろミんミとミあミりミてミ

わよよるさけりあやりのらめと  
先至洛陽城 ハクマウゾマウニイタル 月本  
のめくろりてめる

照鏡看白髮 カハミノテラニテガハツテニル  
このさと此法言よりまさ  
むむといふ故はあつてけ

宿昔青雲志 シユクセキヒイウツテコト  
つひぐより然し中はよい  
飛の女がうにあるうすのう

蹉跎白髮年 サダタリハクハツノトシ  
りかねんおきまへよりりて  
マツちやめくぞかーいとてむ

誰知明鏡裏 タレカヒラニメイキヤツノウチ  
ひさーくけかミガあつてぬ

形影自相憐 ケイエイミツカラアヒアルム  
これバるるかと肩をさすいりぬ

同洛陽李少府觀永樂公主 ラクマウノリシヤウフトラシクエイラクユウシユノハニイルヲ

入蕃 ニル 本町  
らくやれをやり女帝がていよとま

をてけけをつつら  
バ赤姫さぬのやうに大ドはあつて

邊地鶯花少 ヘンチアウクハスクナシ  
らんらといふ五町のやれを

えせへんどのえびをもち  
らんらといふ五町のやれを

もうくむらびをのさくつるやをありしきさしやうるのちが  
ういもろ

トシキタレドモイセダアラタ トシキタレドモイセダアラタ  
年来未覺新 正月まらのうちさくさうをみね  
さておまかえを子一まいもさくたに

美人天上落 ビジン テンジヤウヨリヲツ  
志ろにこのさびえいらくやあり  
女帝がかりへをささくハニうい

龍塞始應春 リヤウサイ ハシヨテハルルベシ  
おろさくを後 おめ のどい  
ふびんをとぢや  
己やうさいおろくつんどのとまを  
そちがーをさしてしめこよひを

静夜思 ヒイ ヤシ  
月もさへよもあつちればんつうひもあしと  
さうやれの耐えしうりめてはよせ  
かえむを一二まいさうせうやのもあさべー

牀前看月光 ニヤウゼン ノツクハツヲミル  
女帝がよひうさーきをあけく  
よりつうにそこでえてめの月うい  
しやうにうんでばうさだも子こをうらうとさひうけま

疑是地上霜 ウタカフニハコレニヤウノシモ  
子にうよひうさぎい目をこちりて  
月とにうさあかておれバ月  
云ツにも回つあもさへる にほ 庭をえれほどあやうあもが  
やうよもさへる

舉頭望山月 カシラヲアケテサシゲツツノヅミ  
のああんごまであうめそやくよ  
があけてさねバエいごとしやうべん  
とたをこむらりのんであつとーてめ

低頭思故郷 カシラヲタレテコキヤウヲオモフ  
ろそうちの女やうとたのまの  
さうちんごこであかまたといも  
子い合ニ安うらちやうささけいとぢや



まといふよりきたる 俠者のうまおまん 屍のけぬ大坂  
までさぐくといふのわいそのなぐきせいにそめいりか  
ウレハニヨツテカクゴトクナガシ  
縁愁似個長 一どねんがあけてあまりいやくまん  
もあやくせうとさー又自あ

よ出店してさうさう此のりきあでもこつけやうとおも  
ひのやうぶあもせこれをおりべ改のけもぬけるやうふかゆを  
れあうぐもさへるやうにおもさう  
不知明鏡裏 かのきがついてさうかみへひるへば  
コハをわすれいっほのやれさことで

ああろまつちぢりやさいく  
何處得秋霜 二つちがつひりへあもぐありのせまい  
志ましくさうさいの洋は日

このさとりりといけいさくのありあいとやきさうさやり  
女帝にまこいりのむねをぢりめさうきをひりりせれるやう

あんどめつりいりのやにかよむはみ又十又がりのでも時く  
うかてあさうせでもひくど大どよくけて利をきくサアを  
やうぬがさいごあんでもへんどきせぬくひりのいさそあき  
二又かをりのよあうぼくのどうい同ドくるにそんでたがいよ  
そこのあされをさぎをさぎうんさんをもあひ合ぢやりのさかい  
はたさうさぎあうぬあよあんのあんどつがあうかぞ合  
がおりやこそあれやさずとそもぞいざんぬううぬやうに  
ささつげあふべーさうくそらと女帝にもこういりのよ  
もをさげニ子まとうりくらをけううくもあれぬこ  
とありのかそらべー

ヒトリケイタイサンニガス  
獨坐敬亭山

けいていざんとい蓬萊さんの  
かさちをうらへ雲をどう  
へてそのあさよいけもせぬま太さんのこまうりせ性  
よつこをこー蜻のあーやたまご柿さどの滑のりぬ

をかりてのこりて出らるるもあつて連城ぶらうふま  
の大こゝんよの志す

衆鳥高飛盡

ちうちやうのちんぎうのぶらうといこ  
ゆらホせりふつうくとひめてた

こゝろひいてをかくる女帝もやうことようこつ  
てしめてゆく

孤雲獨去閑

こうんはちやをありゆくとを  
つむやうを合ぢやといふ

ろよろとひとり此ちやをもお志させのをううとんで  
るいよくさみくま

相看兩不厭

ごいのめのとあつ  
あつとくしてわ

但有敬亭山

ごいほうざりううをうりてその  
のちのれぬてもなくあつ

○評子曰はあ一とい大の志んをうて去るもをうちんまう  
此ひりもあつりもあげといこもつれてくれうもひや  
ひやうに大んづしてお母さごまのちくの女帝  
屋と兼やをふそまはえうぢやよあつてかくのどくも  
うらうとえくしりまのけいあつ

見京兆韋參軍量移東陽

またる女帝より參軍といふこの女ののころん  
にうかうるちんごうとくともかこさるまう  
まといふころでさんぐくとヤウをつわの  
名とはありぬるにさまだろてねんもあきさう  
さうれりのとやうふあつてかんだんよひつ  
うしけるよ女帝のいあれ乃てあさゆのを  
もさえくあつとがなつれまうひ一

小だうぐさうりーろぐへやうやくとていさひあふれども  
今のまづべきにもあふはやうふちのなまごさぎーと  
せびやく又のつとめとでうけてゆくと此女衛まこのこは  
戸所一丁め東屋といふところへもさうりあふれんを紙  
すしつふ

朝水還歸海

流人却到吳

ちやウスイカハツテウニキニ  
リウジンカハツテエニイタル  
りりちちの女帝がオれうへんがあいては戸のこへかえ  
ろーとみちらあふよ又乃つとめにうゝれてゆくはさうさ  
まごとてあり  
アイアフテウクノトヘハ  
この人よぢさよあめてらのうちの  
かきーさをさかあつて

相逢問愁苦

淚盡日南珠

ナニダハユトぐクジツナシタニ  
ところよ鏡人ありさくさうごたまとあふといふ故にあり  
ありは清をかりていふ○西行がいろくあのをなまご一とづか  
ぶかづけたまひめのとありをれがさごにもねうちがいろ  
とまごりたまよあふもいろとりといひくべうごに

臨高臺

リンカウダイ  
かり此をさごの二ついとまごり家と  
かろりてくるあふれればよかど女帝の  
こめよあふれとまごり

相送臨高臺

川原杳何極

アイラツツテカウダイニシム  
セングンエウトメナグキニラン  
まやうのあひでゆく  
二ついありとあくる  
あふれり此へんまでとあつれども  
それかきたぬつねよえぬ



日暮飛鳥還

日のいづれよはばねをねぐさくさむ  
のありてみどそのどくこのあま

行人去不息

いどよりてよりきたりてとづり  
ゆくやうはけをうへぬあまびこ

班婕妤

ひりたをうさびじんありけ女そのあに  
ののにくゆくまへ人のねとこそ

せうけてみかどのぬちやうあいとちとろあつとをりて  
やうりよかこつて長信宮といひとこへひさこんで  
わごとがあらこの班婕妤といひ女帝も倦病をかま  
へあまのこつずきりそのうへがめかかことさう  
くあうふあたるたくとせーてひさこんでわるとも  
あまのこつずきりそのうへがめかかことさう

怪來妝閣閉

あまのこつずきりそのうへがめかかことさう  
まういへこつたまりてわ

朝下不相迎

朝とはうれうとせへでるを役所と  
いふあまはーはたさうよいそん

總向春園裡

あまのこつずきりそのうへがめかかことさう  
いふとありさーまこいげいこ

花間笑語聲

いまををやりしとてんてこつい  
のびりやうよいわぬくらあひをい

ふいこがびりやうにそやまげいこあま一とさーらけ  
るもやうつりれむもまきものつがねさうをこをでたじくわ

鳥のふゆが日人のころもあはればかりしるもよまひ  
くつさるはの法

雑詩

この法はめまみうけれむる女帝を  
すといふりさるゆめきゆめのこころよ

已見寒梅發

己てよりさる一たはていあり  
去年どうろりおあへありさうけ  
のさうたんきもありてつげおこ

十二月のそゑにほあはれかむむいがそりく  
さるひんがさいうあはれこれれれり  
さるひんがさいうあはれこれれれり

復聞啼鳥聲

二月よもまつてあはれゆの  
さるづらまつさるもりつをさるうい

愁心視春艸

さるのくさる一ああさくして  
さるうさたつりめあれどいりえ

良向玉階生

ぬしういへんつてあつらの玉乃  
床まへくさるさるてさるもあれ

玉階玉門を牡口のさるへし志道  
ぬしういへんつてあつらの玉乃  
床まへくさるさるてさるもあれ

鹿柴

鹿柴のあつらるる恒のあつらるる  
さるさるあつらるる恒のあつらるる

空山不見人

空山とひくさるさるつらさるゆめあつ  
あつらるるあり女帝しうまいこと

去るがごとく念をわらふくめんをかりまゝ念あれどいこく  
空山しいゆ人をこぞとほひけはつをむるこまぶといぬ  
いづりさあふとこころあり

但聞人語響 タニニヒキキキキキ 子にやうやくくまゝさていあか  
さはまきてわらゆのがあるといこ

返景入深林 ヘニケイリン 返景夕日れとあれどもこつてい批  
燈とさうがよいそりや人が来ると

九層芥いありれやろのうちへまげて入るぞかやうとあり  
よやうにてうり人のひりりがあつてい

復照青苔上 ニタセトタイノウカヘヲテラス そこでかここをこせまいとうちうけ  
のすそへくしうのむいてわらをそ

わやうのさへして若とぬくさうよあーあふていよくめ  
よあといふ若とぬくさうのさへありさうくらくてん

竹里館 チクニ 竹の館をびーやうにりまゝさう女房乃ざ  
しきありぢうのりやこのさい上ことにも

獨坐幽篁裏 ドクサ こーらわのゆれてをしのされしーとさくかきりてわら  
さうめのやとへあぢも一人つひさ  
かいてのそれさへあぢばをひとり

彈琴復長嘯 タンキン 琴とあれども筆のゆとさるべし  
いけもせぬこをひきたくくさうよ

もわけじよひのやくもくもまればいあかのはひのうへの  
ありやうさうたかてり

深林人不知 シンリンヒトシラズ りくアんとこのむかどらつて一に  
まさいのあつはまは茶のゆ残



のちきせし

不使玉階行

そこでふと女があつていさうなてん

ひやうまかこつて

少年行

武友の二むんばへ中たりのくろきさうり

らうちをのりちすまも大門へのりこまんとま

遺却珊瑚鞭

玉をかざりありさふさをけりむらむら

いさやゆりかきさたへりてうつりこまつてむらむら

白馬驕不行

そこでふるももんまをいさういさう

章臺折楊柳

勢甚ちや女の中あり女帝が

春日路傍情

妻の胆へん世さまでもうーか

送朱大入秦

ゆい女帝ひぢりめんたうち

大の俠あり

ゆい女帝ひぢりめんたうち

一は女帝ひぢりめんたうち

ゆい女帝ひぢりめんたうち

ゆい女帝ひぢりめんたうち

ゆい女帝ひぢりめんたうち

ゆい女帝ひぢりめんたうち

ゆい女帝ひぢりめんたうち

とほらゆのかんまんあつたにこよひかきり此刑はあく先  
 てもたのこのあつたれに容易よきうするりの小あ  
 らに秦の大使のあつたるところなればさき女帝  
 をたたくていも秦の國に虎狼のどくたりの  
 ところへつていふところて怒とすそこでやうむい女  
 帝のべつてえいあるが目う断琴のまじもり  
 て一めんのこととせつてうちころささるやどのの中  
 ばとてけつをつりあつたあり  
 遊人五陵去  
 今夜朱大があつたせいまんごもの  
 ついてわるところへかめをわくせに

寶劍値千金

かこきりりよ甲  
 即利刀のこのさとかこそりせも  
 つてまけあつたあかこを

分手脱相贈

ぐーろろろびーけかこそりせよびよく断しあつた  
 もありとあり

平生一片心

ぐろろろごんせさいすをもちまのころへつちご  
 ろをうちこんでしあよなつてゆくやどにまをさうご  
 よあつていさあんせといふころその義もさうごし

春曉

つくろおとこあつた

春眠不覺曉

ろとをらるものここんでひびをやうご

處處聞啼鳥

處處聞啼鳥 泣きわたりさめしきあはれいよま 泣きわたりさめしきあはれいよま

夜來風雨聲

夜來風雨聲 申のべたうせたまあめれあまきがりあん どのやりにむしやうさささきよかこり

花落知多少

花落知多少 お月くでさなればよいがとまづやう のりまきがつうす紙のこへあひひ

洛陽訪遠 拾遺不遇

洛陽訪遠 拾遺不遇 日夜をいし色 巻をいし色

といふ人のだんごもよくありけああまづくのさ じんごうにてあんどみちまわしれゆのでもおちあ

洛陽訪才子

洛陽訪才子 ところとどくおやんざうへんことよ ぬりめれさいおまきぬへひさし

くうちへへてあをあげまさらもいぐをさうおまのく おんをうりしさとせまうもあよどたうをぬがら乃 それがーあーくおんくませ下さうまうくまどく いのやうをさうとこへる

江嶺作流人

江にへつぐのせよありしとつみ  
のものりかこみんま

聞説梅花早

子てぬしぐいひあんまにわ火る  
いそいむめきもそゆくさいてあは

何如此地春

あんが梅をどがよくさいて火る  
さいとては地のさくごまはれあし

ろさよどかーておよびませうことよつぐのがせよありあん  
しておいそいしちぢやとうていんやさーくまいゆれど  
もとてもそめあるがのうへあももろしまりのじい  
ざんねんとらめあうそ  
いさあぬまどく

洛陽道

ちよ八丁ありは戸へ  
まいる道といひゆ

大道直如髮

かりまでまをうらららら  
そのきーたがめいぬ

春日住氣多

春いあかしくさうで  
とわくむいあうにあもーろい

五陵貴公子

屋のれま  
の次男三男とち

雙雙鳴玉珂

借るもあうぬがうらむを  
らてのつてらるとよまぬぐの

おもーろたりのうのうをかいりてとよまぬぐの  
さうてくるさうをえんたをすあわいもあうは  
あうどまあうあつをれ

長安道

いへへみちといひゆ  
まをら大門まへのいへへ

馬鹿がうねのの



鳴鞭過酒肆 玉せりてかざりしうらむちをうら

で一 ひつりけがんきをささるのへまうーらへまま

袂服遊倡門 どむんいお母くひびぢりめんよ

びろうどれ せんありをうけしる

こまきうら をいやこあれども自づんのありをれとおひかて

わら まぐお茶をへまうける女席をへ人をとどむ

百萬一時盡 びしやうにありさけさんやうひ

あま り 剎はさ方といへぬの百萬といふ大そまよい

んため ありおつひの二三十毎のふとちるべー

含情無片言 うやまむしやうにつうひうけても

てぬ うらやけがおこりてめつ

らサ そのあふといさやされも屈もひつりけぬは野の

そ こておがんもくやいされども二んもざんねんらー

さい をどまよのまけおーへちんまうけたるていとい

べー の譯曰この熱中一たりのぶ草のよいむまこら

る ひのまられしうらぐれのおすこのぶとてまごころ

し ろくもあうーくもさいとあうでいれぬめめ

関山月 出まういところを志のんでくまおのた

へ 関山をへてうさるんざをよらご

一雁過連營 まやうくの丁あめんやうし是播

て うけらとて連營はうー系中の屋基とこま

く ろまちの女席はあうへまうらうらあり

繁霜覆古城

今のいたしぬー此かごであらふ  
糸屋うらあうせがまをふりぬの

胡笳在何處

あうまらぐくもさく尺八はし  
さこゆらこれ必ぬーでうらふ

半夜起邊聲

いよく深更よおしんで歌乃  
聲がまこゆる又もあやうじ城

あけてまつてぬれぬれまあうでてかくのかんざし  
がとんであある実で町子しの一急がまるとはめまきかうと  
ありまらうかーまぶまゆくぢまらり此悲歌ありら  
せいしゆのありゆをさかうと此やうをまてつくとあ  
—を殺伐の音あればなり○評曰はあち

がつてんのまぶあとしえとりあうら女房まゆくの  
ころづひをささるぐありあすべー

送郭司倉

司倉の字をこれば此書はと  
る物と房別のものありしがさうが

映門淮水緑

ぬー此のりあんをりの水が  
門へうりてあせくとこんあ

留騎主人心

一騎當千のぬけぬけをい  
いおまへまよそへあうらハマウちや

明月隨良椽

お月さへおもんをさうり此舟  
月此まいをくぬーの舟

てはやくに鳴ちがくもつきをめてまじりのしんあよ  
春潮夜夜深 よましく潮のさしてくさるるまよの  
ぬいのらもあやのうらへうち

らんであこしてあられあんー○詳は日れういあーよ  
代ののりちやくらむつくとああるその悪養満まひと

### 答武陵田太守

どされ今ぬおさうとよなれ志切もあんの云自由

もみくうししる女帝ありたりもとは女帝はあし  
お神のつとへみをおすそのるんどよこの尚残

### 仗劍行千里

つりてやうといふ太もといふたりそんでいふあり  
ふざん耳かきまをささぬおがう  
くけどされていひであんすぬう  
あまーいふりとなり

### 微軀敢一言

見のちかやうをいひのいひの  
もおそれあきともいひん

### 曾為大梁客

ひり微陵君とやういひるんを  
人の就上もよくのものとあつてこざ

### 不負信陵恩

この信陵さんの子されうちを  
まのあんーさうい今までの

とやめあふりをあらはりとああんすを茶まんほもやああん  
一実喰もよりあんーうちがうら身をまきあんさんと  
トこらうらめしうめとちやのいけさいらくしやうめおいさい

えんむりめとちあんま

孟城坳

田所北うごりに坳埜とて中びく

のころはびーき草屋をたて名を孟

城とあつたため城の点をどして世をさるりの

ありそのむりりたりきたを棒もぶさいもさるり

きりきりせとこりーらくいんまよとありて今ハ女

希ういのえあんを仕とかんをゆりれば懸るの

ころめのもまてそのどんもえんといふををえらこの

結廬古城下

このうーもろとけいせい町乃  
下子をまめもろちといまれあ

時登古城上

そのいまれとけいせい町乃  
うらひんかこまののまよ又女

いまぢよよりあをこめてくさぬ書けおたのまれと

古城非疇昔

けさこまのりかのりていし  
ひりかくれ格式お免の法もあ

まばやくいまどまのおまじきさういさうたふてさうけん

びいよら下らあびむりめんのおもなんやらあめんごりの

合のそのあうまうをさるるあ返まら水脈集集

定者系大全の総をよくあむくぞくしてそのうへの

今人自來往

いまこられけりらへを切り血のらり  
てあう階子のいちたちあけり

祢べけらまがあくあうと大をまよりへらくあれあ

こころよあうげしせんなんなるりあをさるり

てあうらるるのあややくよあまろへ世鄰よあちく

あも女希もさるりあれまいよむりくくま

子鹿のすけはさておきたひもぬもびと眼もまつてわらわわど  
てはくちと見えしり又女帝座のりのごも茶をれりのだ  
もぐやもをれればはるまぬあつたよとらひてそかし  
と掃でいけぬのそめいさせぬれしひたごこれ若れ上  
へこのりをしてきくう掃をいさめるといふありませ  
それかどの滋此つよいり系あはば太史掃子をあし  
と南免のわげをまぜつててまふよとひつをりさせ  
たーといやまやしくをまぜいさるもあるとそとあんよあ  
めていふ清とさるあふば五葉がごころにもあふべし蕩子  
懸さるーあ

鹿柴 ロシサイ け解あ

日夕見寒山 ニツロキカンサン

日のいられもあゆん坂あり大内  
へい坂といふよりいしり

べし又まべくといふまのこをいしれやあゆめめだれあつ

便為獨往客 スナハキドクワカノカシトナル

た一人あゆく性大棒のめ  
いたいこへつてうさくつれもれ

不知松林事 シヤウリンノコトヲシラズ

正月夜此れあれざのいさしは  
そかーさりのぢやまけてまのる

但有麀麀跡 タビキンカノアトアリ

くどく此れあれざのいさしは  
ちどめの一かよといふ文字なる

不系印 フケイイン

あは麀麀といふ清人の妙ありはこころのこころ  
不系印を嘆むる一とありといへり○評よ日集

あは麀麀といふ清人の妙ありはこころのこころ  
不系印を嘆むる一とありといへり○評よ日集

子ねこの意を殺すそのころこにいてそれふてこひきうらみ  
—こゆでさこ—くあるとまたつうさうありともあらぬべし

復愁

この題はさだらて一處處をやりて女帝此を  
話で茶をよくまわれて居りしうそれうら

いろく池言としてやうやくたちうりりこれ處  
とあり復別もさくひつをさいこ—やつはうさひんぬく

ふて復このころこへさておらをはくよとこぬ

萬國尚戎馬

け度のちくちりにも方くのあく  
あやくとたづひまをさうさうどい

さうあつておつてままくつをすう中かあ—とあり

故園今若何

さぞ宿うよまわれていろく  
あやくさうであらう

昔婦相識少

まぐどの傷のこびまんてうり  
こまもめれがうまはれうらよ—

早巳戰場多

せうこりこまなくゆか大を傷せ  
やるといれまがうあつをれれ若

絶句

絶節古字通用およそ絶句といふもの  
へ女帝のつういものなれば題とて

江碧鳥逾白

色面こくみどりにあるへ赤色  
のこつるかり白鳥をどつうけく

山青花欲然

山花がゆめゆらうにこゆるとあり  
は方にあせくとあるとこれい

—ろくひひきすうまへ糸糸一とありをいこの詩  
それをも解—が—をありてうぐめてその解  
さゆるといふさうを基の女帝とさう—とゆらを

人も傷がありて絶えもまなくなりしが

ハヤクステニセン—ヤウヲホニ

とこゆるとこぶ—もすこ—あまう—あり

コウニドリニントリイヨクシロク

去ろくこえく—とあり

ヤマアラシハナモエントホッス

—ろくひひきすうまへ糸糸一とありをいこの詩

それをも解—が—をありてうぐめてその解

さゆるといふさうを基の女帝とさう—とゆらを

てみくこのちまりの女希れ一おをおもくをめてやう  
 けさせそのよきでやうさうだんばらまよひてのせんとき  
 そのもかりエ二のそこやうかしてえいぐくかうまを海と  
 いひをすすむかやうけきをまらんとまるとき大い人も  
 のよてはあまきうらむしき地のをうりしにいつて  
 はうりとせめがらしあひ入のせくその後こぎれあ  
 ことぐくかまらめきれあをたうきうきうこ  
 あるゆあれべ一もでたそこでゆゆのまらさをよめる  
 女希は花のかんぞせ火のどくあうくあつてぬるとり  
 二のめ  
 今春看又過 この春も目をまどだてひて  
 何日 是 帰年 こゝろをこたうめてはいつて  
 出であうまよるあうもたれぬ

長干行 千やウカンカウ 堀の船都の囃多りのゆとハハハ  
 一丁目にく名たうまあ 橋志うも  
 はよくむさくああのとりのうらうらあぬのよて  
 たりこれもはああのと指びやうが怒り堀のあにま  
 と色を甲りて年も一ゆひうくあままねとあり  
 て今へかあるまをともるるうくああでもねきんハ  
 百もはがつくををこころとありぬ  
 君家住何處 キニガ イエイツレノトコロニカジウス  
 づるどあやう見えさうをい方とお  
 めひうかひふれあもどらうあうを女とたがいよん  
 ちをこで集ううかまへ  
 親川でいこざうのませぬ  
 妾住在横塘 セフ ジウソノワウタウニアリ  
 横塘もさくら堀あり  
 へつくにせりま

停船暫借問

又ちうい内子いいでさされませドヤ

或恐是同郷

これあ方桂屋さぬと同所  
それゆく直引で切れと榊葉

さんでいさいうをわくしぬしもぬーさ

詠史

吉原大合を詠めて  
実外を修ると見ゆ

尚有綵袍贈

むーさる女席と茶屋とさ  
よまつて田舎あをむづくひつ

くりしゆありにる村々のあ来るちや屋くろく  
せよゆくするもちかぶろごきて何やう茶屋が耳を  
ねぶつてうへるそこで茶やういふし女席さんぐさん  
ぐねびやうまでそれゆへつれやてくれいとあつちやう

ますどらひこれくごきと中やうをゆくとまますおあひを  
されづつのおちれさあくいいでとまぬーて川をやる  
二ういへ上れば女席のあまいのとささるくされ小袖一ツで  
あうへて居る田舎がらんこりやをあんこくこらん  
あんまりでうろさまげゆめをせむくらでもうろをたいて  
げえよあうこんでままいやこうけさあへいもさあけりめ  
さいやべえよと茶をわくめ希さるをあうくこらんごや  
るよあまいてこれあへーおまうーいゆをぐ二おやめと  
武士で負若よせまつてこつちをうりその合でやうく月  
日をおりあやうが朋家よこいののがあつて度探の合を大  
分つかいこころちがごさんよけかぶせいろくぬけても先  
へ大勢とさんへたひとり是非あく後をさうりあんすと  
いふてかさんうろあがさうりやう百あやそくくの合でこを  
くおやううろあがさうりやう百あやそくくの合でこを



子れびとてくさぬへかむひけがらなりらん争うつそれゆゑんさんや  
有りてしゆとだんぢりして小社も常も祓ぎうくまを去らり  
かき合面あうらへてそさんせたまけやん一こそそれゆ  
へ子今けありれしやてもめんよもあるんをまいけれど  
もとはケークける何が正一屋んの田舎親父あめめし  
のやうな風をながしそんをこつさうさちやいさうでもこれま  
すべいまあこれでもあてられめさいとそん之の松さうどま  
のさめのまさせあうづめきていめやうがあれやさんそら  
で茶をどののよめんベエやまだんぢりしめさうてこらひめさ  
いと百両包をあげいすアアこの  
ハシシユクガカニヤアハシシユク  
テニカノシナルヲシラズ

應憐范叔寒

不知天下士

范叔ハ女帝の詔名あり  
つめさかきしれ  
天下に名たうま棒坊も一登く  
こさるやどのお母かこあるや

猶作布衣者

いふ田舎者あればとてこれ程  
の女帝あつらんやう一であつて  
て居そめ子めのと心かおろさる余程の代物と入るの汗  
よ曰今のむねぬげむをさうさう棒でも心よの目のやい  
ひまてあんやうぢりうりまささなまつめしむれ羽の肉  
つさのこころてこらへん血といニツ一羽よつてさん  
の香もこへ入って誠のつめとかがまれおくの合派をこ  
られをいへ先いへかかやうにんせをひいてわさうよ  
さどといかこころもあれいさうめたまされらむ  
でてもさいといかべーひつさう水月集をよまささあや  
まりゆりといかべー

田家春望

この巻ハ江戸町一丁めのさる女帝  
ゆまりおけがつうくそのくせ大

酒半のんで大平系をいふかへあへのころにさくれ

いよくサケほをかりのむをへくる

出門何所見

うらた田浦をいふてぬるもさう  
ありあれのい戸河の門とて中れ

春色満平蕪

はらうらたあ戸尾まうく  
ちちくくてぬる

可歎無知己

わづくの女希のあをつれてくるも  
あり今途子てるもありあのを

高陽一酒徒

そこであうく中の所を二るん  
まりりて内へさ又例のサけら

ちやえんていちどに

三しいて

行軍九日思長安故園

行軍九日 軍志乃

あまあふはをくらうらの身北上務員のことのうんまよ  
るしいかえろでまつくは女希ゆといは戸まんさのあ  
かりしう親父うかひいれまけてせんこのあくひんを  
さうる去るの九月のあうまらめて中の所へさるてか  
とむい月まありてこよいのたであつことかぬへん板  
まうさへくくかぬかまをさち題くは

強欲登高去

この目大紋目てせひ中の所へあぬ  
あうぬるありても見えへん

無人送酒來

あくんさるれが茶やうさうさを  
あつて来るものもさくかのづう

何を二ういへ送

あのもはくそでせひあくさあうりといふる

これ子ついてもおぼろげなひかきさるく  
ハルカニアレムコエニノキク

### 遥憐故園菊

去の来ううていれぞうてそぞし  
菊も九月もいれううか：さうだ

うけしよあひもようぬあぢがまけて葉とさきとふた  
それいひつふうささめくさんのかここれきくとあひへひま

### 應傍戰場開

セシヤウニツフテヒラクナルベシ  
かこいやひさうのあききくもまじり

### 見渭水思秦川

渭水はうう北田浦より  
秦川はうう南田浦より

さつさりもさ中てんもさよさうであうかあはれ  
ふうーの渾子曰ヤヤく一ねんよあるゆへいまま旅

のりをかひかすさー記ころあり今半ねんもまじり  
まやさとあれてふくうせまらうてわびきもひさます

きんこもすりますやうりそよらのこんからそよま有る  
まべからう

大川へひとろよある秦川は  
とあつべ

### 渭水東流去

いあひびくときうれておまへ  
のこころへゆくはをてふとその

こころもあらもあまのこころへをうれこまかとおひめて  
いこまぬ内の一ひびくううおいてもあぬぬぬぬぬ

ちうこころへまアんせんれどもせかすうこさんせさい  
いッレノトキカヨウレウニイタラシ

### 何時到雍州

雍州はあの家名とこへるかやうに  
いひもさういとのあひあ

いつあまへとまぬまのうれやう  
ヨツテリヤウカウノナンタラソエニ

憑添漆兩行淚  
せめてこのをさうと  
あへたのんじ

憑添漆兩行淚  
せめてこのをさうと  
あへたのんじ

憑添漆兩行淚  
せめてこのをさうと  
あへたのんじ

憑添漆兩行淚  
せめてこのをさうと  
あへたのんじ

憑添漆兩行淚  
せめてこのをさうと  
あへたのんじ

寄向故園流

ヨセテコエニムカツテヤカサシ  
さまのこころを思ふの思んまゝいへなれ  
こころいひの譯子曰一ツのちや屋へのき

登鶴鵲樓

シヤク ロウニボル  
ちれ名をめてて樓の名もたはるは飛  
あつりの手あいの所つちもこころな

白日依山盡

ハクジツ ヤニニヨツテツキ  
日の西山へつひき日光のゆくあふ  
ひるるをてをめてありその日

のちまたもいふも浪もこころいなるこや茶やが女帝とくま  
まつてあなをめてて金ををくまやうこれとかなうとふし  
ころあり

黄河入海流

クウカウ ミニイフテナカレ  
黄の字何の字こころをたつて一  
女帝買の金をつるはよるは何の  
毎日うなれくてあへいれどもつねよあつあまるといふ

ため一々いふれどそのこころで入れてもくはのこへぬ  
またとく

欲窮千里目

セウリノラキハントホツメ  
こころをやうけうけていひよく  
おどろかづいて標をんよりのは

まき芝居をさせて見よふあるひの上ぐさか竹田をよんでか  
らなりと見よふの糸う松傳が一れ上をよんできう  
とふとりかやうにある窮の字困窮貧窮と熟字  
あり持よかやうにあらとしかこころでいふ詩人の奇妙

更上一层楼

チヤ  
サラニイノウロウニボル  
そのうへみ又一層のやせてやうに  
をさせろくせんそふもろとあつと

いっさいこころへあつとりあやのわりつねたる二のほし  
こころをちいしはの譯子曰の年が二十又うたれたこと  
茶屋よあしあつとれままいの大屋へあつとれあつと知べし

終南望餘雪

終南はくむ山と云ふべし  
てはらふこの山れりて云く

歌などにもつくるゆありあの横ぐもの下をばし  
りおやさとみどくあり

終南陰嶺秀

北むき北方よりてらんそよ  
まゆる所の方へむひてあり

積雪浮雲端

こそれ冬よりふりつゆりたるを  
が字雲のもしくまかのうに云

るり女帝のあつこいぬのよやうにもあり

林表明霽色

所の小が北の方かの雲めうつり  
て月れりいれりもそれく

かそく月がれりやうにおもむくそれあへる見せうなりて  
めいとく去り又あえ世の流りおそくあらはれしれへ  
のためりはよい

城中增暮寒

暮るる中を妻よあつてもどく日  
のれがこにあつめいひつきやうけ

ひりりおころさむさととあつとありつめい女帝にいふゆ  
もこのゆりゆりゆりたるとおぢ也

罷相作

相とい家老などのやうあるものなれども  
うでい熱一歩中れ登こくこるべーけ

やこいこの女帝でまければおれぬといめやうをあり

避賢初罷相

いさつてまよふかののでうくあをを  
るゆへあ内子たてをつく女帝が一

くもをいそこで女帝どもがそのんで内後へさぬぐざん  
だんして一歩よとつておとん

樂聖且啣盃

それうらやけざけをむしやう  
よひつつける聖といはまふん

トすみよは白の

為問門前客

タノニトハモンセンノカク  
まづちが一步はさびりて切らぬ  
しゆがらんをまはるべし流もの

今朝幾箇來

コシヤウイクバクコカキタル  
けさううとれどたづめてさうと  
のいあらうちやををりめ二うい

へあが一人もあればよいがそれ見をさいとよとあはれ  
よしみ実いていしゆとちくつてあうとこへる志くむん  
のよい平らうをいふとつがさいとけきおの譯釈く

奉送五叔入京兼寄綦母三

ゴニエクケイニイルヲオクリタテセツテカ子テキボサニヨス  
六叔といひていしゆの妹ありおむさんといふこころは  
戸のまんをくへついでよくを女帝がおくるあり又さ  
死ぶつて婦女帝をけいされて今でいふよなる子よか  
けむつまどくくらしむるも又叔のよわりりところと回

陰雲帶殘日

イエンウンガンニツラオブ  
君をおめへはてさ日も  
えぬの気法

悵別此何時

ワカレライタムコレイツレノトキ  
おむさんいおめてさいしゆで向出さ  
うとれども今までの子にやうや

をを活よありおかよいしゆ一君にうめうりのちいれ  
をちううし月をわくくみちと見まてが五叔をおくふ  
ことなるあり

欲望黃山道

クハウサニドウヲラツマントホツス  
これより婦女帝への伝信ありお  
まへうこのつとめてこむるとまきと

ちがふんぐせもふけいまにありよい光流もあくさの  
上もつまんまんらんうらごみど黄いろをのさびし解よす川  
てもひつとさりたやくけころをを出さいとおかめてあり  
りんすくれとも

魚由見所思

魚エビノリ由ユ見ミ所トコロ思シ  
をつきりおひかきうるあらんくこ  
ばさいとらめておこれるん

左掖梨花

左サ掖エキ梨ノ花リクハ  
中の可カより花ハナかこの門カドのうちと  
あるへー梨リ花ハの女メ帝ミれがんあよくう

をけしやうてあつてりめのぞくもしくぬきさけをー  
でいそいなさけがありのこをいそぶをいもあひぬいて  
わらうといふあやうを中ナカの傍ワタリ中ナカれ所トコロへでうけり

冷艶全欺雪

冷レイ艶エン全ゼン欺キ雪セツ  
そのいろの志シろきりゆきでいさ  
うろとへとをいさかひいさかひさか

志シろいがよいとして志シつくひをむしやうよぬつて花ハのうまへ目  
ををつけよやうて目メろいこの女メ帝ミれをへさへいさめこまぞ  
よいがふろい

餘香乍入衣

餘ヨ香カウ乍タチ入チ衣キヨモニイル  
そのうへちうくあるよあかぎひゆる  
い香カウがまらういさうにこめしる

あのとこゆるこれも又マタふやかぎよいとして降フ子コ散チ舞マユをうりしれ  
しうけかきよは梳カシ負ネまどいよらうがあるそめでのい

春風且莫定

春シユン風フウ且カツ莫サタ定ル  
そよくうせがやまどにふいて  
これさよい

吹向玉階飛

吹フイ向テギ玉ヨク階カイ飛ニムカツテトブ  
ふうりりと風カゼはおれてあゆま  
どまやめりれへよこづけり

ふまづけれといの譯ワカよ曰イハこのせらよだれのでまゆ牛ウシ乃ナ  
ごとい牛ウシはうらさー此ココ和ワ洲シュこのときよりとあつれより  
キアジツゲンロサンニバイノホクジヤウニノボツテリクベツス

九日陪元魯山登北城留別

九ク日ニチ陪ヘイ元ゲン魯ロ山サン登トビ北キ城シヤウ留リウ別ベツ  
えんちの女メ帝ミれとわらわの遊ユ名ナあり山ヤマといふかおそろーま

女メ帝ミれといふこころてまづくこの女メ帝ミれ此ココ出デ一イツ半ハン家カ  
秋アキ遊ユが仕シ合カめのでまけとされて火ヒいさいでせまよ

つとあつてがれあれがよいままいさしてあまの清スガな

つるくとえよりが竹あひ女帝をさぐさむのう  
ろりりかんぐんべー  
綿連 強川 迥 このつちがゆく川もどいとしてしるく  
なにいおまへしおとくれやあんなをこの

香渺 鴉路 深 このつちがゆく川もどいとしてしるく  
なにいおまへしおとくれやあんなをこの

彭澤 興不 淺 このつちがゆく川もどいとしてしるく  
なにいおまへしおとくれやあんなをこの

臨風 動 歸 心 今日つちがうけごされてゆくを  
よはすまののあれどもことごと

平蕃 曲 この二首刑及がらろく女帝をよし系  
おうをよまを悉びまよたしめをよま

渺々 戍 烟 孤 さまがらんやうれところあれも刑  
乃りてのちいさなりもさぐさむ



芭々塞艸枯 芭ウク トンサイサウカ 庭をどのくさもたぐくもへく  
あれたててくさるやうきあり

隴頭那用閑 ロウタウ ナンゾトツルヲモクヒ かくたへいごうごこまいゆのでもさ  
いと出陣へころろをつけてこまり

萬里不防胡 マンリコラ フセガズ 計もろいでいどやまゆのせとつてのけ  
これろろろろ中をいよづく

其二 ツノニ ちどめの一がへり系へ女帝が大せいゆま  
てををく小ぎやうよあるといふ意味をつ

絶漠大軍還 ゼツバク タイグン カエル 絶漠はゆ場あり竹門砂里場  
をかりて大せいゆの女帝ごもを

つれでもくころふど軍があつて大せいゆのこまあつて

平砂獨戍間 ヘイサ ドクゴ こまのむまよにさやうあれ  
もけいごうれりしころもり

空留一片石 クウリュウ イッペンシタ 今でい庭のこびりむらり  
ゆきももつてあつてびり

萬古在燕山 マンコウ ザイアン 樹のありしころと奇人泥人  
ながくはいごあつてむら

逢俠者 ウヘウキヤ この程おいてつておひり白むく  
ろりてつておひり

たて師等ありあゆみ膝よく物をやりあつて



なちやうくもあつてのとわり三枚をけりやあつぬとまは様  
二枚あつころちや二あでいもまよいあれが身よりるたわれ念  
まをうんでわかるといでも三あつていめをうでまも切れまい今  
までの二世にせうらんをうせどわんはつとめうさるじよよ  
くおれををぐりこつておがへてりやれぞうい一の牛  
をいぢんたふよおとらぐりてごみありしおをまうせひげ  
といゆくのちちやれさやどちかぢりでもちやれま丁所  
たれあつてあつらんめのもよいあつといまうぜど丁めの  
たうをすニテめれちや角所のいゆりのたどろやうさ  
うささづつてつまだこちのうぬがをたうくおつとち  
どたつはけめおがへておやづれとらめてめどろとりやみうん  
小僧をたのんでいろくひひまけ三枚こらへておこしや  
ぶさたびくのびうんて家がはいろんてんこくくう  
まうさだもちれをい子いおやうこんのやんせまへはまうけて

かつがらうくあつてやめめりのりういやうしおりの又おをす乃  
方にもうまいつちもらりそまふ

### 寸心言不盡

いろくといあさすどが  
あつとまへとり

### 前路日将斜

こりやけさいりめくれさうまふ  
おやうさうりまよりませうとりの

てりけ出すの詳は日日のういられよりあんどろへ火れつく  
までがめんどのとまよりおしはたまできにゆるまやくす  
りうて二大ゆれこくこち内系も候も美いめのも胆  
おめ希もたがいま見のち一花どまがさまうめてらうて  
ままを傷子のうへでまそれべあちこひをまきゆたなり  
ユウカラムタイ  
江行無題  
三人一歩で六神とまごくそろん  
のめいどんぞう龍のかどへあつて  
くろくまんもんへもまより二十枚であさらやをのえ

もむじまはまきくまい茶番のむきめをさざりまぐはさして  
留は町のあき市であんぞありや一をー又一よその  
たのーこもおまいののどもさいとでみけとこころがわら  
がけはおのひのやちねるちやなごかごせやつりまーや  
とどくごんをさざりかごまついささひ無うせめてもよ  
しつみそこでつばやささざり舟でやるあはなをむといふ

咫尺愁風雨

おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら

匡廬不可登

おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら

つてわら龍のさうだんは匡廬がちやをへらておのひ入  
らさほそのこそこのくちそさあさうりやんをれぞいよ  
風がふくいていふのでいふをあんどもゆくゆく

祇疑雲霧窟

おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら

猶有六朝僧

おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら  
おのひとらうらぬしつら

ひやうひやくこころは上をたがさどもきてわらであく  
よつて見さいのちやの評子日今の巻はぞくうりくつそ  
ばげむがちやれをよくうらここもいあもろくうら古楽府  
まげさるくくと怒むりけさるなさをくひさる女帝と  
わら子おろし学をいあさばしあをせめてのませらる  
どくありあんがふ

秋夜寄丘二十二頁外

も女帝よりあまけあさる各とへこらけあさる女帝  
とあんのあをさでのちへこらけあさる女帝

へより二十ニあるもありぞん  
又ふいせあへくして下さるを女帝があまきつら  
つのは戒名をふるまうを長くい名といひぬ  
キミヲオモツテクニヤニゾクス  
懐君屬秋夜  
龍の茶をうけ仕舞まされ  
夜へさけておつとを女の情ふうとにひあまをさ  
ゆもちり

散歩咏涼天  
そこでもらもちやをへ出うけて其さん  
ははいであんまをうけとやぎせはいで

あんさんと大門はさまでゆきつとどりつとる  
秋の二字儂にぞうせりてあまをり  
山空松子落  
ゆひひりもしてばよもやほへあま  
いと内へ入りて夜をさざめてわれ

いなにゆり物のおちりさるゝとをさつとてこればう  
ごみのまつ氏美よてそありたりかまをかのあひ念がとてい  
て舟中のうらうら美いおちのせぬうといひあまをり  
い石やどひびく落葉引くとおちのあり合のあまべし  
イウジニマサニイで女子ヲサカシ  
幽人應未眠  
松のこけをあれりゆのみあはれよく  
くちをにまをさつとつととえりこつちがさかどよあも  
ふてよも福れれどよわらさどおまももつちがさかどよあ  
てねれれずよござとあまの○洋は日大のきりりあ  
まれよあまのまにうあも女帝ものちくハ  
月るどくまらなだうりあまのありまづい  
祿であらぬ  
コウテキヲキイテリクジギヨヲオクル  
聽江笛送陸侍御  
はあまよやととて  
いとこへて女帝が

つりまぞおろしけところてこくれをす十田舎侍とてゆ  
トラクユウシヤウノフエラキイテ  
遠聽江上笛  
尺八をふくたのときさくあいの山

の句法

臨觴一送君

還愁獨宿夜

更向郡齋聞

いんや今さうれのさぐさきまらあ  
ときまらにいんよびのぐえいあ  
おまへのうりあんーとあしでまい  
よひとりねまらであ  
そのとき又尺八の丁急をさいとな  
ら今のつらいうまーいより  
こつちやあるーしてぞかせうぞかぞとやくのぼりておく  
れるんーの譯は曰はあよあどめでといくであめひりれと  
られさうはたびのさうれ念いうにもぞらちりーたさるすこ  
ゆるこれがほろろあゆれのおあろこくれさよよこぞあゆ

ひつあやるといこまところあれそもあーこみりぬぐな  
くれは女希はたうめのみあは

聞雁

あのだよりをまらをいあ  
こせでせひあく女希をよしをうへうるさゆと

故園眇何處

こがこきまうらいつくれさや

歸思方悠哉

あがくさへー

淮南秋雨夜

あゆげぞいぢこさくあつてくるま  
よついてもこちのくがさるー

高齋聞雁來

つあよんあれぬけ二ういよまらら  
ばきもさくれべとひあさすべさりの

さへあく磨へぬのつらひをさるとやうけがへぬでいなうと  
あざれふりー○譯は日いくるは多をりてあうく磨へ日  
本をしへんまでが百文で百でもあれが二百文とるそのう  
たのともせぬやせさぬくさづり酒をねごりてぞかもある  
ぬ又茶屋のぬめつたはさくまれば女帝とさるはありやあせ  
めたりそゆせんあうだん八百文の文にもあうぬめ  
を指てさくこさう書でも持糸一さうとさるさて又  
縁起よに命をぬ減を折くくひさうてさんとあまれ  
ひつどれ方がうつさくさうぢきでよいは女帝あんの丁んが  
ぬめつてさうとあめそのあがまのく間く

### 答李澣

### 林中觀易罷

あかの遊名あり女帝の方くさあせり  
にその遊名あり女帝の方くさあせり  
あつんせのころくちや屋くさあせり  
や林中の女帝のおけくあつさる

ゆをやのどくといふころ易といは書に悔吝の書なれぬ  
とさーていふぢきさよんかとりて大ききついでぬとせぬび  
しんがあつさるさくこととせぬ

### 溪上對鷗閒

あめそのくさあひさぐべつくりて  
あうくさくさてあちついでぬサア  
志てあつさるといふやうをそあつてさくさくひがあんとさ

### 楚俗饒詞客

あまへの内はさうい所へんあれをこ  
こいろへりひやるさうこのあんか  
おかいとさいてあつんを

### 何人最往還

その中でも何とつものさあ出入で  
ありしんをやう今どいであう二  
三人つれてきてあつれあう一かへ又あんどい  
てやるとさへり○譯は日女帝といふあめいさうを性

のめがうまれくくる事やう合をば何まいこれあへてせ  
んべいゝあんのやうにおきてわらげいしやせ何くつれてま  
てさされとけういゝあんのやうはあつてわらう言麻をそ  
わくお氣よまつてこれ何まいといあんの事何人とい合  
いらうがてゆと軒をひやをりぞかておやうかば  
らうを鬼のやうにおめてわらうおれ

婕妤怨

けはゆりまよえたり志うれどもけし  
ゆかゆかあいらくやそくのあも  
るくちやゆりもさだらてまよへやうよまよへまよ  
ころもろくでひろく奈まがひさうけのさづけねばあぬ  
のうへとこゆるまをそちけ女帝のまさめらあり

花枝出建章

花枝出建章  
らせが来てひらひよしづる花のどく  
うがりたておれさうをひさつれ出てゆく今のあはくいでい

鳳管發昭陽

又ひくふぎ一死でいあがまたとえて  
たこさこせんせんでめりやまをさくひうけ  
おまらぬ二羽のさう死りちまは  
まぐれあよりまをせうよいとく大

借問承恩者

つくりまゆまつといぬつてめんよ  
かういぞよあくとくがあを二  
まぐれあよりまをせうよいとく大

雙蛾幾許長

つくりまゆまつといぬつてめんよ  
かういぞよあくとくがあを二  
まぐれあよりまをせうよいとく大

題竹林寺

今戸あよりけおとこやうまざと  
名をうへるもの大なるの二あが  
まろびやうで死んぶるとのあせよあはれあり



もろり 氣識 したるとこや

歲月人間促

年々 短く 暇く ぬらん 日く 何や ゆく

促の促の字いままでいはいあの出わけし何の苦勞もな

くりしよこれよりいせめぬううてあらふ

烟霞此地多

もかくべつ 契めさてえん

殷勤竹林寺

わろ 字が のうん あれがさひてま

更得幾回過

又こころかとかめめてもやそで

○譯は日このとされるみどせ 意味

秋日

あされ 日いさこ いたりのあれが

返照入閨巷

夜の日あより 窓の日のけむさ

閨巷へ廊下を不送こーてそのまこといふゆかり 日

憂來誰共語

かり 誰を 一やうにもあいてうない

古道少人行

れさたうこやけほもぬきんでのび

へらばいてうごうぬれどあり たんがのへんあれが下まが下

秋風動禾黍

やがれどもまへあはれせうかにつれ  
てどろろくしきくぐりい

うりトヤ和黍ハシヨヲハシヨヲウゴカス

和張僕射塞下曲

張僕射ハ女帝のい  
名ありいしつて張の

つよい女帝あれば名とす塞下の曲軍場の事をつく

月黑雁飛高

客の飛るはよき乃夜の文づみ  
をどもるをこやこくいのをど

ツキクロフシガントブトカシ

單于遠遁逃

單于へえびその大しやうこでは  
いちりさあまたちかこま

欲將輕騎逐

そこでまうりの文づみひまどまよ  
びておつうけさせ

大雪滿弓刀

田所あさりまでしりてとつてく  
そはがもをい大ゆさで中しくお

がれて大ゆんをぬんととるうひて物ぞうをつけおきたれども  
つあよぬよあひひいまた大ゆんを出るん  
ケイキヲモツテラハントホツス  
大いセツキウタウニミツ  
田所あさりまでしりてとつてく  
そはがもをい大ゆさで中しくお  
い○評は曰これ女帝がわうしといゆへトヤありく乃  
涙もやうせはかのれをりそりこかゆく身よ志ぬる  
とこく又いあが内しやうてかづのころろつあ  
とんあうとくに大ゆさあればぬ日ほどあつへは出  
ぢやこふひつれていたるのとき利よたぬざくと  
帳中しくはゆりても一あがりのああるあさりまをむ  
ゆいはいとらちやつてあくとこへり

別盧秦卿

知有前期在

あのをいなきあり何月何日か入  
くざるとしてきてあるあり  
又まのいのざりなきありあれど  
もあふのこれとひていれどな

難分此夜中

サアそのあれどもををさす  
ころちやいや

無将故人酒

あんがおちしたのりでもまじり  
あふあふぬひさしいあふみ

不及石尤風

逆風として人をかひくをまじり  
よいをさあふいぞなきさすは

あまいそのをよまけり

あまいそのをよまけり

幽州

ゆしちうをよめり刑をさすれりへお  
てかをうを女帝座の内よつとめてわ

征戍在桑乾

いくさのあふぬどろのなにく  
どうしくよ死をぐれめあふ

年々薊水寒

まねんく浦のをぐれれあが  
こぼさそんてわさそくゆれお

殷勤驛西路

わんごろよよつくろさ  
かぐくくわ

此去向長安

たゆんく田所をかりにわへ  
こみゆくといのゆをぶあつて

あれどもそれもあふぬ  
くちいりゆ

三閭廟

屈原へ三閭大夫といふ廟でありしと  
名又は楚京の南尾といひ一も

かきありしは二人の川へ身をまげその名まらせり  
のころそのゆめいふををりて修りてつとむら  
て大をこの言尾大夫をよみ入んとお母の金  
泥をつひひり日どにかよひくれどもぎ一たをかりつとあ  
て肌をけがさばそこで大をやりをおうて救ふ  
の黄金をりてが船一舟ふて又といひかこころまで  
つれきたりいらく寝席をまむる大まも今いつ  
びべきにもあはねばいりやいりのよ二世を世の災  
依りていふはたといふやうな身へあはるる君はか  
よまよふるゆへあはぬとの一言金石のどくおれは  
そもいまくくあり切こころしは川へまて  
もいひ又大まがのれとがをあげたりともいひ情

沅湘流不盡

け又の流れやむとさるたごとく  
なる尾がうらうらとつくるおあるべ

屈子怨何深

この男は屈後一とこの子は  
らにあのをこふくして御くれ

日暮秋風起

舟の仕来もさうしよあまこきぬ  
水面はあうりけて日のおくれ

月はさみしく  
あめそく

蕭々 楓樹林 そのおとぞつくともちやうで  
とあり いふ 尾の 楓 のち とりのありありそのうらみむ  
ときを死をいふ

思君恩

小苑 鶯歌 歌 つくる君とりのあをきた  
てういひけらたこがたやを物

長門 蜨 舞 多 それより女帝はざーまへくさ  
みぐくニクいへあがるおのこ一國一城のあじのついで

眼看春又去 うやうよまぎくい小ぎやうあま  
あとかくおされくちがう

翠輦不曾過 此女車よのせてあやうをさるや  
あがつくうとおひかてぬ

登柳州 蛾 山

嶺南 いふ のやうのときをやうところの  
嶺南といふ女帝はまよりうていおれつま

荒山 秋日 午 ひる日なうそろとかしへ出うりて  
見ればあやうとりのみとして

獨上意悠々

ひとりぼつてこころいやく  
二方いへおぼりたるひとり色をま  
てのうきをうりゆくまのゆを

おもひの情み入るもてしをまのまらぬるのこそししてさ  
とのほをぬぬのうへドヤ

如何望郷處

たしかまが旧里のあの方うとあ  
ひーにどこであつたらぬ

西北是融州

とれよ西北の方とまきしが  
はまご上電をかりこへるとを

めて人ごころうつまーとおかへる

秋風引

あつらひとりの秋よ  
あつらひとりの秋よ

何處秋風至

うれぬるのうけ  
うれぬるのうけ

蕭々送雁群

よも雁をよおうんで風をよ  
とあいておほくの雁をいて

朝來入庭樹

よちけ方ういよく秋れ  
あつらひとりの秋よ

孤客最先聞

よ棒といふよらうとされてあつら  
いそらうよの棒よ白

うらにも三念にもゆくゆのよてまうくまると女席が  
をかくゆのありあつら子のうへいれどやのうへいれ  
あつら

鞅路感懷

さうをーさのの意のり  
あつらひとりの秋よ

去もへきたたら天あけがこゆるとゆへうんじん

あつぬていをつくる

馬嘶白日暮

一日のりまをされふるまひよどく  
まつてむしやうよいむる日をもろ

く山のそへまづむ

劍鳴秋氣來

くれづこよあま風がどつとさうか  
どぶつくさるまもやいなや

でれれとく武をさるひのまもどぶかもあつぬこを

我心渺無際

さしのみ中もかろくれづつ川

おつりまもままつとるふへつもない

河上空徘徊

先川原のやまいぶふろくとこ  
うちをままつめどりつしてぬ

さいこい武たのるあれべつあつた方がづかである

古別離

あま一こりりなれさるあのみたち  
つりさるありそれゆへさびくむん

あつあつてめいさくあれどもささうひくれぬあつた

欲別牽即衣

あさうりれささ衣をひいてのみ  
いづもかやろるさけのたぬ

さうあれば又十おいていさくあれあん

即今到何處

いさくあんをよごのあつ

不恨歸來遲

あつそさうかそいとさうらや  
さうはたらんせんあつに

莫向臨邛去

かあさうさう川つんとあつふ  
とあそびたりんしてむご今

まつひあんをさや

尋隱者不遇

尋隱者不遇 隠者不遇此方のこあしに  
松の影はまが来てたづぬれはかみろがあいさつと

松下問童子

松下問童子 中月ま此内のゆあり  
らや春へきてりかまろくわうとらふ

言師採藥去

言師採藥去 言師採藥去 言師採藥去  
言師採藥去 言師採藥去 言師採藥去

只在此山中

只在此山中 只在此山中 只在此山中  
只在此山中 只在此山中 只在此山中

宮中題

宮中題 宮中題 宮中題 宮中題  
宮中題 宮中題 宮中題 宮中題

輦路生秋艸

輦路生秋艸 輦路生秋艸 輦路生秋艸  
輦路生秋艸 輦路生秋艸 輦路生秋艸

上林花滿枝

上林花滿枝 上林花滿枝 上林花滿枝  
上林花滿枝 上林花滿枝 上林花滿枝

憑高何限意

憑高何限意 憑高何限意 憑高何限意  
憑高何限意 憑高何限意 憑高何限意





秋日湖上

客と船へ出て感さかこ

落日五湖遊

日のういくれよ又の

烟波處々愁

たゞき目くれい物かゆふよは

浮沈千古事

びうーををといくるを

あゝく志きりみ物をこくな

誰與問東流

をさきりしを尾の

題慈恩塔

と慈恩よををてしを

漢國山河在

川もあり

秦陵草樹深

墳墓も塔たちあふんであり

暮雲千里色

目のくれがううう雲がかこり

無處不傷心

トコロノユロヲイタズト云フナレ  
これを見ればさるるよありしむじ  
いれをうざりし  
莫の建野銷死燕秦の姫の女にもおとらぬ  
祀の英人どもを新ひ

伊州歌

伊州ノウタ  
伊州のありしが伊州へ来  
てさうかうにかふけさめよい女房を

聞道黃花戌

キクナラクワツクハ  
戌のさうりよまけせひとりを  
解で去りおをささるといふ

頻年不解兵

ヒンネンヘイラトカズ  
あつていついくさまらうに  
まいねやせうこりもあつた

可憐閨裏月

アハムベシケイリノツキ  
むらゝ二人が祢やハス  
りりー月の

偏照漢家營

ヒトヘミカンカノエイラテラス  
今かむくら場乃のこりまをこ  
よみつてのらさめぐーい中を

其二

打起黃鸝兒

ワウアウシラタキソ  
人のこころもあつたぬぐんせをしの  
おさうおさうをいけまのこりい

ののがおるよよつてささうーてこれぬがよい

莫教枝上啼

シビヤウニナカレムルヲナカレ  
さーた申をくさいまりりあげくの  
そてへるまきさる

啼時驚妾夢

ナクトキセフガユメヲオドロカシ  
そのまきやうくのしゑ  
い目がさめく

不得到遼西

レウセイニイタルヲエサラム  
出る申のあつぬ身あればせめ  
てゆめまむりもしりてんとい

とちのめ大の申のころをさすうてのけさ情をいふ

哥舒歌

カシヨノウタ 女帝の池ありびり  
うらかりんをかたれををといくりけ女帝も  
とこぶるをいれりのこ園行心まらりつよく  
たて引流るけるよ一ツいひぶんをきめのあれば時  
乃標ども名  
とすといふ

北斗七星高

ホクト セイタカシ  
兼のふりさるをいめて女帝の  
兼量のとうまよにとし

哥舒夜带刀

カシヨ ヨル タウヲオブ  
あるとまひ女帝此あまごくをけ  
のころさ切文をかくりてや此を

臺へ由くとまら茶やもあるとらよまつての申あれば  
あつぬ神にくくをてあついよくめさづかういあしとあ  
ゆめて級コウの女帝とあつてあつ兼く入りけけよあゆひ  
をらうす大門よまづう利刀をひくめしひつそく  
てその髪をきりその身いをぐにうち入くらあをを  
らどめちこ来社キヤんをすきてのをうちさりてい  
けもせぬわつをいぐもつねきれぞんとをうし  
とくや

至今窺牧馬

イニニイタルニテムヲボクスルヲ  
それうしてよ一系の川  
もたらをありあもひをといふ

ハ

るもあつに今の今までもさげのさういまれよん  
をどの大つをそつと出てゐるにもものゝけに  
てやうくいきたるうらしてゐるのも  
るさつといありぬこれひとよは女帝の  
るんやうり

不敢過臨洮 アエテリン ウラヨギラス  
このひりぎれのあつらひの  
いされていげらあをどかんり

河の門きこをり ヒトニコタフ  
この懸人よこととありてあてどころを  
さへりて大い中きんの先せさいとくを  
うらさくかめひ極丹丸なる  
なくあやうりあにちやをへくるをつらと

答人 ヒトニコタフ  
この懸人よこととありてあてどころを  
さへりて大い中きんの先せさいとくを  
うらさくかめひ極丹丸なる  
なくあやうりあにちやをへくるをつらと

偶來松樹下 タシクシヤウシユノモトニキタツ  
極丹丸日ゆく雲うさり  
とらととこころなり  
いこころ外夷のわ地あれが合さ  
いつへい極丹丸をういてにーたの

高枕石頭眠 タラヲカフノヒミタウニチムル  
夜をてわさるこころあり  
い戸よおてい石のうくの住居  
おとのげれんとあつなり  
もくあつといふあり

山中無曆日 サンチウノキジツナシ  
山の突あんとそのやうに  
寒盡不知年 ツキムシクニヒトシヲシラズ  
日本中大晦日  
るこよまつくひぐさまつく

寒盡不知年 ツキムシクニヒトシヲシラズ  
日本中大晦日  
るこよまつくひぐさまつく  
家祝の差別もあつなり

正月よあつしあまふ年ふりもこさぐりておふよあつ。や  
 とさどくうさひうけねさうりむろぐどつむさつむいやを  
 やきたいさどこちとひかへー。○譯み曰大にそつあ  
 があれば備念乞のりひまけよよいとやしくい内しやう  
 い女房もあもつしうぐくの計にこのむもろたかも  
 こやけくしとこやちろん女房を茶屋へやほり  
 ーやむまかしらふあー。あうれが若の樂のさねらく  
 い若の衆又虚語よあし。は若子まあしーまく

蕩子笠狂解

五絶終

ハリヤサ。コリヤサ。ヨイ。く。マアトセ。ハ  
 リヤサ。コリヤサ。サツサ。マアトセ。うんちん  
 ちのたう歌をそ。志許しー子  
 魚雀さ先生能高子笠  
 去処ぞちと見や。なましく出来  
 ましーとや。あ月集乃上中  
 乃粹に於て下粹斗をまろく。注

ちし流し一匙 サとみと答曰白水  
有<sup>い</sup>而<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>上<sup>い</sup>揮<sup>い</sup>ハ果<sup>い</sup>報<sup>い</sup>之<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>で揮<sup>い</sup>と  
以<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>思<sup>い</sup>又<sup>い</sup>中<sup>い</sup>揮<sup>い</sup>をい<sup>い</sup>也<sup>い</sup>みの飛<sup>い</sup>切<sup>い</sup>  
乃<sup>い</sup>以<sup>い</sup>身<sup>い</sup>て<sup>い</sup>法<sup>い</sup>め<sup>い</sup>る<sup>い</sup>處<sup>い</sup>を<sup>い</sup>坊<sup>い</sup>獨<sup>い</sup>下<sup>い</sup>揮<sup>い</sup>  
乃<sup>い</sup>之<sup>い</sup>郭<sup>い</sup>中<sup>い</sup>此<sup>い</sup>語<sup>い</sup>を<sup>い</sup>得<sup>い</sup>茶<sup>い</sup>を<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>  
完<sup>い</sup>成<sup>い</sup>之<sup>い</sup>一<sup>い</sup>本<sup>い</sup>此<sup>い</sup>差<sup>い</sup>を<sup>い</sup>以<sup>い</sup>て<sup>い</sup>有<sup>い</sup>が<sup>い</sup>此<sup>い</sup>  
以<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>く<sup>い</sup>か<sup>い</sup>如<sup>い</sup>一<sup>い</sup>予<sup>い</sup>が<sup>い</sup>云<sup>い</sup>未<sup>い</sup>タ<sup>い</sup>流<sup>い</sup>を<sup>い</sup>得

い打てお方ヨイしく 固<sup>い</sup>か<sup>い</sup>そ<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>く<sup>い</sup>見  
流<sup>い</sup>を<sup>い</sup>益<sup>い</sup>森<sup>い</sup>汁<sup>い</sup>夢<sup>い</sup>又<sup>い</sup>く<sup>い</sup>何<sup>い</sup>世<sup>い</sup>し<sup>い</sup>好<sup>い</sup>く  
莊<sup>い</sup>子<sup>い</sup>魯<sup>い</sup>標<sup>い</sup>乃<sup>い</sup>筭<sup>い</sup>を<sup>い</sup>朱<sup>い</sup>を<sup>い</sup>郭<sup>い</sup>  
通<sup>い</sup>云<sup>い</sup>と<sup>い</sup>予<sup>い</sup>わ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>日<sup>い</sup>を<sup>い</sup>龍<sup>い</sup>と<sup>い</sup>化<sup>い</sup>して  
向<sup>い</sup>向<sup>い</sup>自<sup>い</sup>谷<sup>い</sup>志<sup>い</sup>く<sup>い</sup>分<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>大<sup>い</sup>を<sup>い</sup>と<sup>い</sup>  
草<sup>い</sup>以<sup>い</sup>採<sup>い</sup>く<sup>い</sup>跋<sup>い</sup>と<sup>い</sup>朱<sup>い</sup>を<sup>い</sup>云<sup>い</sup>  
茶<sup>い</sup>金<sup>い</sup>散<sup>い</sup>人<sup>い</sup>

明和七庚寅六月

日本橋通三丁目

京屋吉兵衛

かきのた  
あ





